

入試改革が私学学校経営に与える効果：私立女子 中高一貫校の改革事例から

著者	石井 豊彦
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	161-175
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000588/

入試改革が私学学校経営に与える効果 —私立女子中高一貫校の改革事例から—

Effects of Entrance Examination Reform on Private School Management: From Reform Cases of Private Girls' Junior and Senior High Schools

石井 豊彦*

Toyohiko ISHII

抄 録

品川女子学院（東京都、私立女子校、6年制一貫）は、グローバル化への対応として入試改革を成功させた。結果、多様な学力を持つ入学者を受け入れるとともに、少子化の中で出願数をふやすことができた。また、入試改革により、受験生と保護者へ教育方針（「28project」と名付けている）の理解が促進された。これらのことから、学校経営の安定化に貢献した事例として入試改革を報告する。

品川女子学院は、2015年度入試まで知識と理解能力を測る4教科型入試を3回行っていた。2016年度入試からそのうち1回の入試の出題内容を、習ったことをいかに表現するかを測る出題とし、異なった学力の合格者を出す入試に変更した。この新しい試験導入で、4教科型入試の不合格者が、表現する力を測る試験で合格するケースが倍増したことは、この変更による成功と言える。

2つ目の改革は2018年度入試から行われた算数のみを測る入学試験である。これは受験機会を1回多くし、算数に優れている入学者を受け入れることを目的とした。

I 入試改革を考えるに至った理由

1. 筆者と品川女子学院との関係

筆者は、2004年4月より品川女子学院に転職し現在に至っている。それまでの経歴も入試改革を考えたベースとなっているので、簡単に紹介する。

1979年に大学（上智大学理工学部）を卒業後、薬品会社（藤沢薬品工業：現アステラス製薬）の営業職を2年経験した後、1981年から公立中学校教諭を11年間（大阪府5年、香川県6年：1988～91年はパリ日本人学校に派遣）勤めた後、1992年にベネッセコーポレーションに転職。主に高校向けの試験と教材の編集業務を担当し、1998～2004年まで進研模試の編集長として、入試問題の分析や模試問題監修を行った。全国の模試採用高校を訪問する機会を得、高校現場の先生方との交流から、もう一度教育現場に戻って自らが指導を行う願望を持ち、2004年品川女子学院に転職して現

* 品川女子学院相談役 関西国際大学学長特別補佐

在に至っている。

品川女子学院では、前職の経験から、初年度より現在まで入試事務局に携わり、2004～2019 年まで入試事務局長（2008 年から教務部長兼任、2011 年から副教頭兼任、2012～2019 年まで教頭兼任）を務めた。入試事務局の主な担当は、出題入試問題の製作（原稿作成と印刷・製本）と入試当日の実施責任となっており、入試制度や入試問題の改革を考える立場にあった。

2. 私立学校の責任と入試改革

私立学校は、独自の建学の精神と教育方針を持って経営されている。魅力的な学校であり続けることで第一志望の志願者を継続的に産み出し、それが、学校経営の安定化につながっていく。また、公立学校と異なり、人事異動で教員がいなくなることが無いため、卒業生がいつでも懐かしい学校に帰ってこられる。いわゆる、「母校」としていつまでも存続し続けることも、私立学校の果たすべき重要な責任である。したがって、私立学校は、時代の変化に対応しながら、学校の魅力を増す努力を忘れてはならない。

少子化と公立6年制校の設立の影響から私立中学入試の受験生が減少し、大学入試の大幅な改革が予告され、その変貌への不安から、大学への進学が保障される大学付属の中高への人気が高まっている。これは、大学との付属系列関係を持たない品川女子学院の学校経営にとってマイナスに働く要因である。この課題の解決には、受験生が「この学校で学びたい」、保護者が「この学校で学ばせてみたい」と考える魅力を持つことが何よりも大切である。そのため、品川女子学院は、2003 年から「28project」と名付ける教育方針を設定し、未来社会で活躍できる卒業生の輩出を目指して活動が続けている。

これらの背景から、筆者は「28project」への貢献として、より、本校の教育方針が受験生と保護者に伝わり、賛同を得られる入試の仕組みの変更を考えるに至った。

Ⅱ. 品川女子学院はどのように建学され、現在の教育方針を持つようになったか

1. 建学された経緯と建学の理念について

品川女子学院（東京都、私立女子校、6年制一貫）は、関東大震災が契機となって1925年（大正14年）に創立された学校である。

創立者の漆雅子先生は「家庭と両立しつつ、将来は政治や経済にも関わって社会に貢献する女性を育てたい」と考え、まずは、女性の手に職をつける「荏原婦人会」を組織した。その2年後、関東大震災が起これ、品川地区も大きな被害を受けた。婦人会のメンバー達は、避難所を設置し、献身的な運営を行い、地域の被害を最小限に抑えることに貢献した。この取り組みが評価され、女子教育機関の設立のために、地域の自治体や個人から資金やミシンなどの物品が贈られ、これに創立者の私財を合わせ、「社会で活躍する女性の育成」を設立の理念として「荏原技芸伝習所」が設立された（図1）。



図 1 開校開設当時の校舎写真

その後、1929年に品川高等女学校、1947年に品川中学校、翌1948年に品川高等学校、1991年に品川女子学院と校名を変え、女子教育の必要性和意義を大切にしながら現在に至っている。

2. 未来社会を志向する教育方針を持った経緯

太平洋戦争が終わり、社会は大きく変化し、女性の社会活動への参加が広がっていった。1986年には男女雇用均等法が施行され、意欲を持った女性が管理職を目指し活躍できるようになり、現在の安倍政権の女性活躍の政策につながっている。言い換えれば、日本の戦後は、女性が活躍できる場が広がり、女性の社会関与が期待されていった時代ともいえる。しかし、品川女子学院では、創立当時の「手に職を持って就職を目指す」という考え方が継続され、時流の変化をうまく取り入れることができなかった。そのため、1977年には中等部入学者が5名になるなど、学校経営が低迷する時期を迎えた。

そこで、1980年代後半から学校改革を始め、まずは部活動を強化し、平成に入ると同時に、総合的な学校改革に着手した。1990年に新制服を導入し、1991年には「品川中学校、品川高等学校」から「品川女子学院」に校名を変え、女子教育に特化する学校である決意を発信した。

制服、校名を変えての学校改革の意志は、受験生や保護者まで届いたようで、図2のように、出願者数の増加がみられた。次に、品川女子学院は、建学の精神の「社会で活躍する女性の育成」の「社会」を「未来社会」と定義し、未来社会に存在する多様な価値観に、自主的に関わりを持たせる教育活動を増やしていった。これらを、生徒達の人生と未来社会を連結して考えさせるライフデザイン教育と呼び、2003年から対外的に「28project」の名称で発信を始めた。

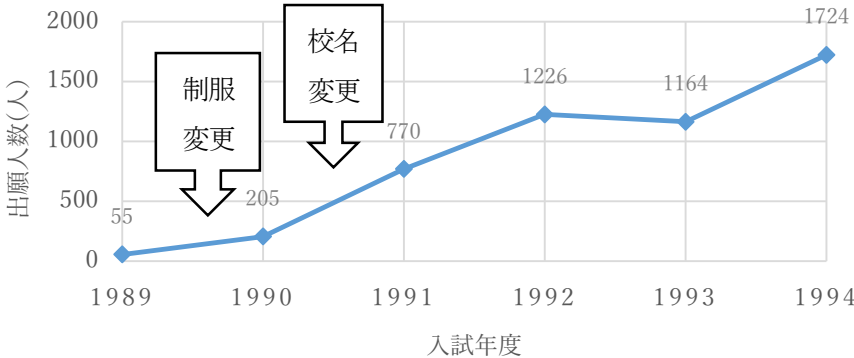


図2 中等部入試 出願者数の変化（校内の資料を基に筆者が作成）

【参考】

品川女子学院の生徒数、教員数（2020年度学校紹介パンフよりP68）															
生徒数		A	B	C	D	E	F	G	合計		職員数125名(非常勤職員含む)				
中 等 部	1年	35	35	34	35	35	35	34	243	650	1282	理事長・校長・教頭	3	保健・体育	7
	2年	34	34	35	34	35	35		207			英語	25	芸術	5
	3年	40	40	40	40	40			200			数学	17	ネイティブ講師	6
高 等 部	4年	44	44	44	43	43			218	632		国語	17	図書館司書	3
	5年	45	45	43	42	42			217			理科	13	養護	5
	6年	28	33	34	34	34	34		197			社会	14	事務・他	10

社会は変化し続け、女子教育の目標は、一昔前の「良妻賢母の育成」から、現在は「社会のあらゆる分野において、2020年までに指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度とする」¹⁾と具体的な指標まで閣議決定され、未来の女性活躍社会を目指している。これらのことから、品川女子学院の「28project」は、社会から求められている教育方針といえる。

3. 「28project」と名付けたライフデザイン教育と実行項目

「28project」の名称は、検討開始時の日本女性の第一子平均出産年齢が28歳前後であったことからつけられた。

女性の28歳前後は、仕事では、期待と責任も持つ中堅とよばれる立場になる。一方、プライベートでは、結婚、出産、育児といった転機を迎え、仕事と家庭との両立に悩む時期となり、ここで本意ながらキャリアを中断する女性も見られる。しかし、男性はこのような悩みを持つ時期は無いので、女性には独特の未来が存在すると考えてよい。だからこそ、男女共学ではなく、女子に特化した教育が必要なのである。本来祝福されるべき結婚や出産時に、自分のキャリアをあきらめる選択をしなくても良いように、中高の在学中に女性独特の未来を学び、理解したうえで、自分の人生を考える女子教育が必要なのである。

品川女子学院の「28project」²⁾は、生徒達の視野を拓けながら、校内と校外の多様な人達と接する機会を用意し、興味関心と課題解決のスキルを増していく活動であり、その実施は、主に各学年の総合的な学習の時間や関連教科の授業時間で行われている。

3. 1 各時期に行う「28project」の主な取り組み

(1) **中学1年**：「地域」を理解する。

まず、品川女子学院の「地域」である品川地区について学ぶ。私立学校は「地域」の人達に理解され存在を許されていること、そのために今後も応援していただける学校でありつづけなければならないことを理解する。

各班(4～6名程度)でテーマを決め地域の調査を行う。技術家庭科の授業でPCでの画像編集を学び、調査の成果物として各班でコマーシャル映像(30秒程度)を作成する。例えば、「品川地区の防災」「品川駅のバリアフリー」等の映像が各クラス内で発表され、クラスの優秀作品を学年全体会で発表し共有する。品川女子学院では、グループによる調査や検討の結果はプレゼンによって発表され、学級内発表で学級代表を決め→学年会で学級代表プレゼンを学年の生徒全員で共有する。

(2) **中学2年**：「日本」を理解する。

「日本」の文化について、外部から講師を招いて華道、茶道、着付けの授業を実施して、その基本的な考え方を学ぶ。

文化祭ではクラス毎に「日本」に関するテーマを設定し、生徒達が調査し発表する。このとき、書籍やインターネットからの2次情報と、自らがインタビュー、アンケートを実施して直接入手す

る1次情報の区別を理解させ、調査を進めさせる。

グローバル化社会では、国や地域のアイデンティティをお互いに尊重し理解することが求められるので、日本の文化・歴史の理解は教養であることを学ぶ。

(3) **中学3年**：「世界」（「世界→外国」と「卒業後の世界→仕事」）を理解する。

「世界→外国」について（修学旅行先のNZでホームステイ、外国から日本を眺め異文化交流）

3学年3学期の2月下旬～3月に修学旅行を実施。全員でニュージーランドNZを訪問し、ホームステイ（1家庭に2名の生徒が基本）しながら、現地校に通う毎日を過ごす。修学旅行は7日間（泊4日のホームステイを含む）であるが、希望すれば、ホームステイをさらに2週間延長でき、毎年約95%の生徒達が約3週間のホームステイを選択している。日本では、同年齢の中学3年生達が高校入試に挑んでいる時期に、自分達は、外国から日本を眺め、異文化に触れる経験ができています。この機会を、まさしく6年制一貫教育の恩恵である。

生徒達は、現地校の生徒達に、各自テーマを決めて日本の文化について英語でプレゼンを行う。また、家族と3週間も離れて外国に滞在する体験は、生徒達を大きく成長させる機会となっている。それは、帰国後に多くの保護者より、娘の人格的成長を喜ぶ声が学校に届けられることから確認できている。

さらに外国へ行って学びたい生徒達のために、高校1年時に留学（姉妹校や提携校への短期3ヶ月、長期11ヶ月を紹介）制度を用意し、学校外の留学支援制度（トビタテ留学ジャパン等）を利用する生徒を加えて、毎年20～30名程度（本校の1学年は約200名）が留学している。

「卒業後の世界→仕事」社会人として活躍する世界を考える

総合的な学習の時間を10時間程度使用して、会社やNPO等で働く人達と「企業コラボ」と名付けて、共同で企画を検討作成する活動を毎年行っている。会社で働く方々との共同作業を通じて、会社が利益追求とともに、社会貢献をする組織であることの理解を目標としている。

「企業コラボ」は、まず全体集会で、企業ミッションと取り組む課題が説明され、次週から、協力会社の社員がクラスに1名ずつファシリテーターとして入り、担任教師と協力して、生徒達が企画を練る過程に参加する。時には企画案に厳しいアドバイスがされ、生徒達は会社内で求められる責任や安全性へ厳しい基準を知ることになるが、同時に、社会貢献の実感も伝えられる。仕事は、つらくて苦しいものというイメージを持つ生徒が多くいるが、「企業コラボ」を通じて、やりがいのある仕事につく重要性和充実度を理解し、自己の未来について、考えるきっかけとなる。

(4) **高校1年, 2年**：「起業体験プログラム」（会社を設立して経営を体験する）

中等部で、会社は社会貢献を担う組織で、その貢献度が売り上げと利益につながっていることを学んだ。その学びの延長として、高校1, 2年では、各クラスで「起業」を体験する。

「起業体験プログラム」と名付け、各クラスで株式会社を設立して、文化祭の模擬店を運営する。

中学3年生と高校1年生は、起業する会社の企画書作成が春休みの宿題となり、新学年が開始されたら、新しいクラスで、各自の企画書から、クラス全員で作る株式会社を決定する（4月）。

次に、社長、会計、広報部長、監査（学級担任）等の役職を決め、クラス全員が一人500円を出資して株主となり株式会社を設立する。6月に経営方針のプレゼンを高校1年、高校2年の合同学年会で行い発信し、足りない金額を、学校（銀行の変わりを）行う、原資は前年度までのプール金）から融資（プレゼンの評価から利子等の融資条件に差がつく）を受ける。生徒達は、必要に応じて校外の企業等と交渉し協力を得ながら、文化祭で模擬店を運営する。文化祭が終了した翌日に合同学年会を持ち、各クラスが運営決算報告をプレゼンで行い、利益が出た場合は、寄付、配当金（上限は3000円、残りは次年度の活動資金へプール）等にあててから会社を解散する。

「起業体験プログラム」は、クラス全員がそれぞれ分担を持って行動し、成果をあげる活動のため、その円滑な運営のリテラシーとして、高1年生対象で、外部講師を招いて、「権限によらないリーダーシップ」講座を実施している。

（5）**高校2年**：CBL^{注1}（チャレンジ、ベースド、ラーニング）の実施

28projectの最終段階として、2学期の後半の家庭科の授業（週1回の2時間連続）で、課題解決授業であるCBLを行う。

各クラスで、3～4名の班を作り、身の周りにある問題点から課題を自由に設定し、その解決策を検討する。生徒達の班には、職員が1名ずつメンターとして協力（有志の職員を募集し、家庭科の担当教諭が各班に振り分ける）し、生徒達に助言をする。

検討結果を各学級でプレゼン発表し、家庭科教員とメンター教員、クラスの生徒達がルーブ

リック評価を行い、2学期の家庭科の評価に組み入れられる。各プレゼンは録画され、高校2年の生徒と全職員が見ることができ、発表に参加できなかったメンター教員は映像を見て評価を行う。次に、学年集会でクラス代表のプレゼンを共有し、上位の評価を受けた2班には、オーストラリアの提携校への派遣と、英語でプレゼンを行い提携校の生徒達との交流をするチャンスが与えられる。

（6）**全学年共通**：社会で活躍する人達に接する機会（特別授業）の実施

社会に存在する多様な価値観を、学校の教員が全て伝えることはできなもので、品川女子学院は、社会で活躍している方をお願いをして、生徒達に直接話をする特別授業を毎年25～30講座程度行っている。

講師達からは、学校の教員には無い影響力を生徒達に発揮されている。例えば、ある講師が「心

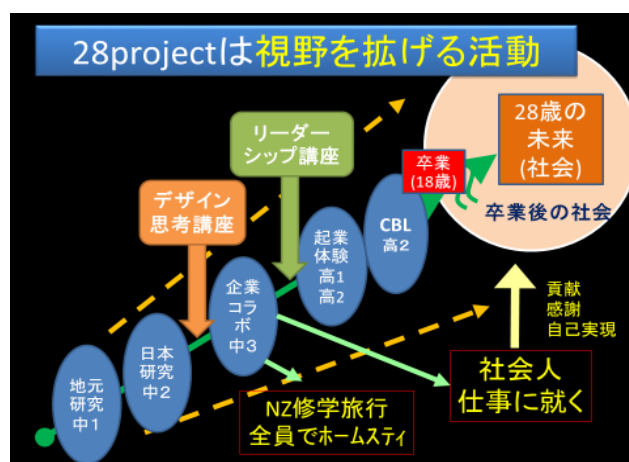


図3 28projectのイメージ（筆者作成）

理学を志すのなら、統計を使う学問だから、文系でも数学は必要だよ！」との発信したところ、入試科目に無いということで数学の授業態度が今一步だった生徒達が、授業態度を改め、勉強し始めたというエピソードがある。なぜ、多くの特別授業が行えるかというのは、品川女子学院には、教員が、生徒達に直接話をして欲しい方がいた場合は、特別授業の募集や準備を自分が行うことを条件にその場で特別授業を依頼しても良いという不文律があるからである。社会で活躍されている方々は、生徒達へのアウトプットの機会に意義を感じる方が多く、謝礼は基本的に支払われないにもかかわらず依頼をお引き受けいただき、多数の特別授業が実現している。

3. 2 「28project」が目指すところ

よく「28project」について「高等部卒業までに、将来を決めなくてはならないのは実際には難しいのではないのか」という意見が寄せられるが、それは誤解である。

「28project」は、早く自分の将来を決めなさいという指導では無く、生徒達一人一人が、将来への希望を探るアンテナを立てて学校生活を送ることを目標にした指導である。中高生時代を、毎日の授業、明日の宿題や定期試験のような目の前の事だけを心配して過ごすより、「将来、どのような社会で、どのような人達と一緒に、何をしたいか」を考えながら過ごして欲しいと願っている。

現在の中高校生達が生きる未来には、大きな変化が伴うことが予想されている。例えば、アメリカの未来学者のレイ・カーツワイルは2045年前後にAIの能力が人を上回る「シンギュラリティ」の到来を予想し、今後様々な価値観の変化が起こるとしている。³⁾ 大きく変化する未来に向けて、希望を探るアンテナから情報を得て、修正を加えながら、主体的に生きていく意欲を持ち続けることが大切である。生徒各人が希望の軸を持つことは、未来社会での活躍につながるのである。

3. 3 「28project」は大学進学結果にも好影響を与えた

図4は、品川女子学院の現役での大学進学先が卒業生に占める割合のグラフである。2010年前後から進学結果は上昇しており、2003年ごろから始まった「28project」が、進学実績の向上に貢献しているといえる。「MARCHクラス」は、明治、青山学院、立教、中央、法政とICU、学習院、東京女子、日本女子、津田塾の合計%、「国立+早慶上理」は、国立大学、早稲田、慶應、上智、東京理科の進学者合計%。

「28project」の活動から、生徒達は、志望の大学、学部を、自分の将来の理想と結びつけて選ぶようになった。これは、従来型の「少しでも偏差値の高い大学を目指す」受験意義よりも「一人一人の希望がかなう大学に進学する」という受験意義と目標が深く共有されたからである。目標が共

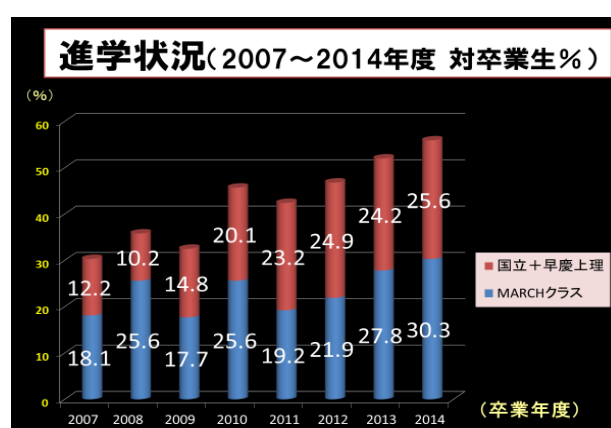


図4 現役の進学者の推移 (卒業生に対する%)
(品川女子学院 HP の公表データを基に筆者作成)

有されると、「権限によらないリーダーシップ」⁴⁾が発揮されやすくなる。例えば、筆者が高校3年生の担任時には、一人一人が目標達成に努力し、模試の結果が出たときには、担任の面談以外にもお互いに助言を交わし、励まし合う光景が見られるようになり、推薦入試等で早く進路が決定した生徒は、教室の整理整頓を率先して行う等、全員で受験勉強を戦っている雰囲気になった。大学入試が始まっても、級友の合格や不合格を心から祝福したり残念がったりしていた。担任として「28project」は、受験勉強の孤独から生徒達を救う効果を持つと感じた。

Ⅲ 入試制度の改革（2016年度入試から開始）の実践報告

1. 2015年度までの品川女子学院の入試について

東京都の私立一貫校の入試は毎年2月1日から始まる。

品川女子学院は、2月1日（第1回）、2日（第2回）、4日（第3回）に、国語、算数、社会、理科がそれぞれ出題する4教科型の入試を行っていた。配点と解答時間は、国語、算数は各100点満点で各50分、社会、理科は各60点満点で2科目を60分で実施していた。しかし、同内容の入試を3回続ければ、同じタイプの受験生が合格していることが予想されていた。

2. なぜ、合格者の学力が同じタイプではいけないと考えたのか

Ⅱ、2で、品川女子学院の教育方針は「未来社会で活躍できる生徒の育成」と説明した。未来社会の課題は、複雑で難解であるとともに、その変化のスピードが早いとされている。そのため、個人の知識では対応が難しく、プロジェクトチームなどが編成され、多人数での対応が有効であると予想される。これは、チームでの議論や共有を行う時、そのメンバーが同質であるより多様である方が多面的な議論が期待でき、効果的な結論に近づけるからである。

これらの観点より、「28project」では、チームでの活動が多く用意されているので、多様な学力のある入学生を迎え入れることが有効と考えた。そして、2016年度入試から第3回入試を4科目表現力総合型として表現力や発想力を評価する入試に変更し、2018年度入試から算数1教科のみの入試を新設し、算数の得意な受験生が合格する入試に変更した。

2. 1 4科目表現力総合型（第3回として実施）の内容

（1）4科目表現力総合型入試と合格者の変化

第1回、第2回の4科目型入試が、主に、知識と理解の有無に対して得点が与えられる出題内容であるのに対して、4科目表現力総合型入試は、知識や理解を表現できるかどうかに得点が与えられる出題内容とした。この変更により、第1、第2回入試の不合格者が第3回目で合格する人数が、それまでは5～10名程度だったのが15～20名（合格者数は約50名）と倍増した。

ここで特筆したいのは、以前であれば不合格になっていた受験生のうち、表現力に優れていた受験生が合格となっているので、これは、入試変更をした目的に沿った結果といえる。

(2) 出題, 配点, 時間等

4科目表現力総合型は以下の形式で実施されている (160 点満点)

試験Ⅰ・・・試験時間 60 分, 2016 年度以降は 70 分, 算数, 社会, 理科の総合問題, 120 点

大問 1 (10 点の算数の基本的出題), 大問 2 (20 点の算数の応用的出題)

大問 3, 大問 4 (各 45 点の算数, 理科, 社会の融合問題)

試験Ⅱ・・・試験時間 50 分, 読解・論述, 40 点

800~1000 字の課題文を読み取り, 問 1 で 100 字程度の要約。問 2 で 300 字程度の自由作文を出題する。

(3) 出題内容について (出題検討委員会で検討する体制)

4科目表現力総合型入試は, 独自の入試のため, 出題検討委員会を立ち上げ (入試事務局長の筆者が委員長を務めた) 問題内容を検討する体制とした。委員は, 国語, 数学, 社会, 理科の出題科目の教科から各 2 名が参加し, 年度が変わる時には, 1 名が留任し, 1 名が加わる規則とし, 委員会メンバーの入れ替わりながら, 多様な意見吸収と継続性が持てるようにした。また, 出題科目以外の教員も立候補すれば参加できることとした。(2018 年度は情報, 英語, 2019 年度は情報の教員が立候補し参加した)。試験Ⅰの大問 1, 2 は数学の教員が作問, 大問 3, 4 は数学, 理科, 社会の教員を各 1 名以上含むグループ 2 つで融合問題案を作問し, 1 ヶ月に 1 回程度全体会を持って検討した。

以下, 出題検討委員会で決めた出題方針を, 出題事例を示して紹介する。尚, 各出題は, 品川女子学院 HP にて, 過去の出題として公開されている。

試験Ⅰの出題

①-a 表現する内容に対して, 受験生が知っている前提を高める工夫をした出題

出題例 (2018 年度大問 4 (4))

(4) 鬼怒川温泉はアルカリ性のお湯がわき出ています。小学校の理科実験室にあるものを使ってこのお湯がアルカリ性であることを確かめます。どのような方法で, どのような結果になれば確かめられるかを説明しなさい。

解説: 溶液の性質は重要事項であり, その確かめ方を自分の言葉で表現させた。

受験生は, 自分の知っている指示薬の名称を 1 つ答えて, その調べ方を表現すれば良い。

一般に, 特定の指示薬を指定してその変化や変色を問う出題が多いが, その場合は, その指示薬を知らない受験生は解答することができない。本問は, 受験生が知っている指示薬を 1 つ例にあげて説明すれば良いので, 白紙解答を減らすとともに, 採点者に正確に伝えられる表現になっているかどうかで得点差の生じる出題になっている。

①ーb 選択肢の中から受験生が知っているものを選んで記述させる。

出題例（2017 年度第 4 問（1））

問題文（東京から JR の新幹線と在来線を利用して、出雲市に旅行する小学生の花子さんの家族について）を読んだあとの設問

（1）花子さんたちの新幹線での会話にでてくる下線部（あ）浜名湖（い）関ヶ原（う）琵琶湖（え）安土城（お）姫路城について、あなたが花子さんに解説するとしたら、どのようなことを伝えられますか。2つ選び、それぞれ説明しなさい。

解説：このような出題は、一般に「（あ）浜名湖について、あなたの知っていることを述べなさい」と限定的な問いとして出題される。しかし、この問い方では、受験生が浜名湖を知っていなければ解答できない。そこで、本問では、5つの解答対象の中から2つを選ぶことで、受験生のほとんどが解答できる設定を作った。

②現象や公式を自分の言葉で説明できているかどうかで得点差をつける

出題例（2018 年度第 4 問（1））

問題文で、各国の年降水量と各国の一人あたりの年降水量のグラフを示し、問題①では、国別の一人あたりの年降水量を求める式を考えさせ、次の式を得たうえで問題②を答えさせる。

$$\text{一人あたりの年降水量} = \frac{\text{年降水量} \times \text{国の面積}}{\text{国の人口}}$$

②年降水量がほぼ同じ国でも、一人あたりの年降水量が異なる場合があります。この場合、一人あたりの年降水量の多い国と少ない国にはどのような特長があるかを説明しなさい。

解説：問題①で得られた「一人あたりの年降水量の算出公式」から、その公式から得られる情報を考えさせ記述する問題。

一人あたりの年降水量を増やしても年降水量が変わらないためには、国の人口はどんなにばよいかと具体的な数値を入れてイメージするか、公式の3つの変数の1つを固定して残りの2つの変数の関係を考える等、色々なアプローチがあり、それを表現すれば良い。

③発想をみる（正解が多数存在しているなかで自分の発想を論理的に記述させる）

出題例（2017 年度第 5 問（6））

問題文に岡山県美星町を訪問したときの記述があり、以下の問いに答える。

（6）花子さんは、この夜、たくさんの星を見ました。「もっとたくさんの星を見たい」という花子さんにその願いをかなえるためのアドバイスをするとしたら、あなたはどのようなことを伝えられますか。3つ書きなさい。

解説：解答の根拠を示して表現できているかどうかを評価する出題。

・夜空が暗い方が良く見えるとする解答例

新月の日は夜空が暗くて良く見える

町の明かりが無い山の中なら夜空が暗くて良く見える

・用具を使うと良く見えるとする解答例

望遠鏡を使うと小さな星も見えるのでたくさんの星が見える

- ・ある意味飛躍した解答例（理科の教員からは、このような発想をする受験生は歓迎との声）

宇宙ステーションなら空がくもる心配が無いのでたくさんの星がみえる

冬の北極にいけば一晩中夜なので星が良く見える

- ・その他，理科的に正しければすべて正解として得点を与えた。

⑤考察の結果をグラフや図にして表現させる

出題例（2017 年度第 5 問（2）②）

（2）下線部（い）「星の明るさ」は，最も明るい星を 1 等星，目で見えるいちばん暗い星を 6 等星として 6 段階に分けられました。19 世紀になると，明るさについてさらに観測が進められ，等級が 1 つ小さくなると明るさが $\frac{5}{2}$ 倍になるということがわかるようになりました。

②6 等星の明るさを 1 として，1 等星から 6 等星までの星の明るさを解答のグラフにそれぞれ点で書き表しなさい。また，点と点をなめらかな線で結び，グラフを完成させなさい。

解説：問題の指示から，6 等星を 1 として，各等級の星の明るさの値を計算し，解答用紙のグラフに対応した点を打ち，点と点を「なめらかな線で結ぶ」の指示を守れてグラフが書かれているかどうかのポイントになる。グラフを書くのも表現と考えて出題した。

試験Ⅱの出題

⑦条件を守って，自分の意見を表現させる出題

出題例（2018 年度）

宮下聡氏の「中学生になったら」から「自由と責任」について述べられた部分を掲載。

問2 自由にはどのような責任がともなうか，あなたが考えたことを文章で教えてください。また，文章に題名を付けてください。その際は次の【条件】を満たすように書くこと。

【文章の条件】

1. 学校や家庭など，身の回りで起こったことを例にすること。
2. 例にあげた内容について，あなたの意見がわかるように書くこと。
3. 原稿用紙の書き方にしたがって，300 字程度で書くこと。
4. 段落は二つか三つつくること。

【題名の条件】

1. 題名欄の空欄に書くこと。
2. 「〇〇(の)自由に対する，△△(の)責任について」と書いた文章の内容がわかるように意識すること。

解説：採点をするときのポイントは次の通り（この基準は，入試説明会で配布される冊子で公開されている）。

○テーマ「自由と責任」に合っている内容かどうか。

- 自分の体験と、考えや意見の関係が伝わる論理的な文章になっているか。
- 題名は、書いた内容に関連しているか。語句を抜き出して付けただけでなく抽象的にまとめられていると高い評価を与える。
- 指定された数で段落を作っているか。
- 原稿用紙の使い方は合っているか。カギ括弧の I、段落の 1 コマ下げ、行頭に句読点を置かないなど。誤字や脱字は減点対象。

2. 2 2018 年度から第 1 日目の午後に算数 1 教科入試を新設

2018 年度から、1 日目（2 月 1 日）の第 1 回入試が行われた午後に算数 1 教科入試を新設した。算数 1 教科入試は、算数のみで合否を決定するため、算数が得意な受験生に有利な入試である。

100 点満点、60 分で実施。受験生のほとんどが、午前中にどこかの私立中学校を受験しての参加のため、開始を 15 時と 16 時の二つのグループに分けて実施とし、遠隔地の受験生にも安心して受験できる配慮をしている。

問題の難易は、本校の他の受験回と同じで、受験生には、特別な難問を解くような対策は不必要と発信している。そのため、過去の入試では、他の回は得点率 60%程度が合否ラインとなるが、算数 1 教科入試の合否ラインは、70~75%程度と上昇する結果となっている。

この件に関しては、塾の関係者などから、せっかく算数の得意な受験生が集まるのだから、数学センスの豊かさを判断できる難しい出題をしたほうが良いとのアドバイスも受けたが、「品川女子学院が大好きな算数好きの受験生」に合格してもらいたいと考え、他の試験回と同じ難易にそろえている。ただ、せっかく算数好きの生徒達が入学したので、2018 年度入学生より、数学の習熟度別授業を 3 年生から 1 年生の 2 学期に早めて開始し、その学力がさらに伸びるように対応している。

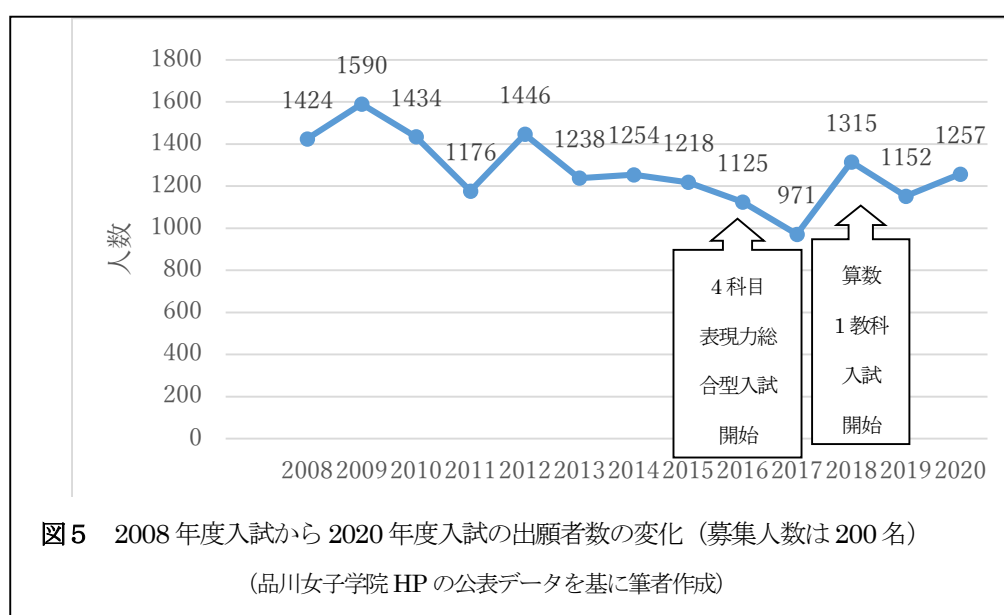
IV 入試改革が学校経営に与える影響

図 5 は、最近の出願数の推移のグラフである。少子化の影響もあり、漸減していた出願数は、算数 1 教科入試の新設による増加もあり、一息つけた状況になっている。入学試験料も重要な収入源となり、多くの志願者から合格者を決めることができることと併せて、学校経営の安定につながると考える。

しかし、筆者は、この入試改革が入学者の多様性を高めたことに、大きな成果があったと考える。第 1 回と第 2 回の 4 教科入試では、受験勉強（塾や学校の指導）を真面目に行った受験生が、算数 1 教科入試では、算数が得意な受験生が、第 3 回の表現力総合入試では、表現力のある受験生が、加えて、帰国生入試^{注2}、英検加点^{注3}により、英語の得意な受験生がそれぞれ合格する仕組みとなり、4 種類の特長を持った入学生を迎えることができています。また、この入試制度から、未来を先取っている学校のイメージを持ってもらえている。入試説明会後のアンケートにも「未来社会を本当に意識していると感じた」「大学入試の変化にもきつとうまく対応してくれると期待している」といった声が寄せられている。

入試改革の実施について、2018 年度の算数 1 教科入試の新設の翌年度には、近隣の女子校 2 校が同日の午後に算数 1 教科入試を設定し、それ以降も同様の入試を実施する学校が増えている。これは、ライバル校からも同入試の発想が評価されたと考えられる。また、4 教科表現力総合型入試については、受験生へのアンケートから、公立 6 年制校の受験者が約 3 割を占めていることが判明し、私立 6 年制校以外の受験者を呼び込む成果になっている。表現力を評価する出題内容が公立校の適性検査を目指す受験生を本校の受験生とすることができたことも、評価としたい。

今後は、多様な生徒達がお互いに高め合って、彼女達の「チガイ」が「チカラ」に変わっていく具体的な教育活動とその効果について探って行きたい。



参考・引用文献

- 1) 男女共同参画局（平成 15 年 6 月男女共同参画推進本部決定，第 3 次男女共同参画基本計画（平成 22 年 12 月閣議決定））
- 2) 漆紫穂子『働女子が輝くために 28 歳までに身につけたいこと』（かんき出版）p3～8，2017 年
- 3) 中西崇文『シンギュラリティは怖くない』（草思社）p21～22，（2017）
- 4) 日向野幹也『高校生からのリーダーシップ入門』（ちくまプリマー新書）

「権限によらないリーダーシップ」に関する要約

様々な要因が複雑に絡み合っている問題では、グループの一人が指示を出す「権限によるリーダーシップ」よりも、一人一人がリーダーシップを発揮して共同で解決をする「権限によらないリーダーシップ」の方が、多様なアイデアが解決に用いることができるため、すばやく対応でき、かつよりよい成果を生み出しやすい。「権限によらないリーダーシップ」の発揮には①目標の共有、②率先垂範、③同僚への支援が必要としている。

報告書の図 4 の進学実績の向上を、「権限によらないリーダーシップ」に当てはめてみると、

- ①目標の共有：クラス全員が「希望の未来につながる進路に進む」の目標を共有
- ②率先垂範：目標の実現を目指して、それぞれが受験勉強に熱心に取り組む姿勢をとり
- ③同僚への支援：模試の結果などから、お互いに助言を交換する。スランプに陥ったクラスメートに励ましの声、集中できているクラスメートには賞賛の声をかけあう（お互いのフィードバックにあたる）と考察でき、今まで以上に受験勉強と向き合う空気がクラス内に生まれたと説明できる。

注1 CBL (Challenge-Based Learning)

アップル社の教育関係チームが組み立てた課題解決型授業 PBL (Project-Based Learning) の手法で、ICT 機器を活用する。品川女子学院の教員がアップル社の教育研修会に参加して興味を持ち、2014 年のスーパー・グローバル・ハイスクール(SGH) 認定申請時に課題研究の 1 つに高校 2 年生の家庭科の授業を使った CBL を加え認められ、現在も継続実施している。(品川女子学院の SGH 指定期間は 2014 年～2019 年)

注2 帰国生受験

一定の期間を海外の小学校で過ごした受験生対象に実施。2020 年より実施。

注3 英検加点

英検 3 級以上を持っている受験生に、級に応じて合否判定の総合点に加点する制度
具体的な加点数は募集要項に明示されている。英語の授業は初歩からスタートするため、中 1 中 2 年の間は、2 級以上を持つ希望者向けに別授業を行っている。

Abstract

Shinagawa Joshi Gakuin Junior & Senior High School, a private comprehensive girls school located in Tokyo, has succeeded an entrance examination reform, which aims to fit to a global society. Consequently, the school enrolls students of many variety of academic abilities and has increasing number of applicants while in the declining birth rate. Moreover, the reform facilitates understanding of the educational policy of the school(named 28project) to both the applicants and their guardians. Now we report the entrance examination reform as a contribution to stabilize school management.

The school had the four-subject type entrance examination for three times until school year of 2015, which test their knowledge and abilities of understanding. The school changes the contents of one of those examination from 2016 to test how to express what they learnt in order to have students having other academic abilities. This examination can be said succeeded as the school have about a double of students enrolled who failed in the four-subject type entrance examination but passed at the one to test how to express what they learnt the before and after introducing this new examination.

Second reform in 2018 is to have a new entrance examination, which test only mathematic. This is to offer additional chance of examination and to have students having excellent mathematic abilities.